第7回
国際ボランティアワークキャンプ in ASO

7th International Volunteer Work Camp

Contents

02　目的／概要
03　スケジュール
04　オープニング　基調講演
　　アイスブレイク
05　第１分科会（フェアトレード）
　　第２分科会（自己表現）
06　第３分科会（多文化共生）
　　第４分科会（ボランティア）
07　第５分科会（国際協力）
　　第６分科会（日本文化）
08　第７分科会（防災）
　　全体報告会
09　留学生から
10　全体交流会
　　未来職道
11　アンケート
　　Smile Station

目的・概要

目　的　高校生、大学生等、「若い人材」の「生きる力」を育む

２１世紀の教育におけるキーワードを「国際」と「ボランティア」と位置づけ、高校生が日々の地域でのボランティア活動を点検しながら、自ら企画、運営する国際ボランティアワークキャンプ（ボラキャン）を阿蘇の大自然の中、２泊３日の宿泊型で計画・実施しました。

第７回となる今回のボラキャンへは一般として75名の高校生、36名の留学生が、またサポーターとして15名の日本人大学生が参加しました。分科会活動を中心に様々な活動をとおし交流、お互いを理解、「思い」を共有し、日ごろの生活の中で活かせるボランティア活動に結びつけていきました。

今回のボラキャンのテーマは、**「Let' s Take Action!　～俺が拡げる　君と繋がる～」**で、この大会で経験したこと、学んだこと、考えたことを自分の周りの人々へ伝えていこうという願いが込められています。

概　略

・実施年月日　2012年8月10日（金）～12日（日）2泊3日
・実 施 会 場　国立阿蘇青少年交流の家
　　（〒869-2692　熊本県阿蘇市一の宮宮地6029-1）
・参　加　者　139名（一般高校生75名、EC高校生28名、留学生36名）
・主　　催　国際ボランティアワークキャンプ実行委員会（Executive Committee 以下EC）
　　（高校生の構成メンバー及び構成団体については、最終ページに記載しています。）
・後　　援　熊本県教育委員会、熊本市教育委員会、熊本日日新聞社

「未来職道」（いろいろな活動家の話を聞こう）への協力者（敬称略）
国際協力：桑江 直人、木下 俊和（JICA九州国際センター）、津江 あゆみ（フェアトレードシティくまもと推進委員会）、生山 洋一（日本フェアトレード委員会）、岩坂 省吾、吉野 緋奈（フリーザチルドレンジャパン熊本）
多文化共生：岩谷 美代子、竹村 朋子（外国から来た子ども支援ネット）
環　　境：市原 啓吉（町古閑牧野組合組合長）
ＮＧＯ：多原 真美、原田 君子（福岡NGOネットワーク）
ボランティア：竹屋 純子、寺崎 拓（オハイエくまもと）、江副 ますみ（一般社団法人キャリアプロジェクト21）、興梠 寛、上石 立子（昭和女子大学コミュニティサービスラーニングセンター）
アドバイザー：興梠　寛
事 務 局：徳淵　健一、下田　隆文（KIF）

スケジュール

8月10日（金）

9：30
熊本市国際交流会館　出発
（専用貸切バス）

11:10
国立阿蘇青少年交流の家
到着

12:00 ～ 13:00
昼食

13:00
開会式

13:30
基調講演

14:30
アイスブレイク「世界の挨拶」
「ネームチェーン」

15:40
分科会活動パート１

17:45 ～ 19:00
夕食・入浴

19:30 ～ 21:30
全体交流会

22:30
就寝

8月11日（土）

6:00
起床

6:20
清掃

6:45
朝の集い

7:00
朝食

9:00 ～ 17:00
分科会活動パート２

17:45 ～ 19:00
夕飯・入浴

19:00 ～ 21：00
未来職道（いろんな活動家と
出会い話し合う！）

22:30
就寝

8月12日（日）

6:00
起床

6:20
清掃

6:45
朝の集い

7:00
朝食

8:40 ～ 10:40
報告会

11:00 ～ 11:30
閉会式

12:00
国立阿蘇青少年交流の家
出発

13:00 ～ 14:00
昼食（阿蘇草千里にてお弁当）

14:00
阿蘇　出発（専用貸切バス）

15:30
熊本市国際交流会館到着
（解散）

オープニング　基調講演　興梠寛氏（昭和女子大教授）

「私が変わる、社会は変わる」

報告者：木下めい　（文徳高校）

第7回のボラキャンを始めるにあたり、興梠寛先生に「私が変わる、社会は変わる」というテーマで基調講演をしていただきました。ボランティアの発祥、海外での取り組み、そしてボランティアの定義付けについてお話していただきました。

1902年に絵本『ピーターラビットのお話』を出版したビアトリクス・ポター氏は晩年、その印税で英国湖水地帯の15の農場と4000エーカー(16㎢)の土地を購入し、自然と村の景観を守るボランティア活動「ナショナル・トラスト」運動に参加しました。このことからピーターラビットはイギリスのボランティア活動のシンボルとなっています。

また、イギリスやヨーロッパでは「ギャップイヤー」という社会制度が広がっています。これは若者たちが大学などに入学する前に、国内や海外で１年間ボランティア活動をしたり、趣味を深め就労体験をしたりすることが出来る隙間の１年(=Gap Year)を設けるという制度です。この１年間に学生たちは実社会での様々な体験を通して将来の自々のあるべき姿を学びます。

後半はボランティアの定義について参加したみんなで考えてみました。皆さんは「ボランティア」という言葉を聞いてどのようなことを想像しますか？ボランティアの定義は「共生社会の実現をめざして、目的や価値に共感し、社会的使命をもって自らの自由意思で行動すること」です。そこで、「赤ちゃんでもボランティアは出来るのか？」「ボランティアは強制してもいいのか？」という2つの問題について、参加者が会場内でYes・Noの2つに分かれて、それぞれの意見を話し合いながら考えを深めました。私自身新しい考え方を知ることが出来ました。質問によっては極端に少数派、多数派にわかれることがありましたが少数派の意見にも『なるほどー』となかなかに感心させられました。

オープニング　アイスブレイク

世界のあいさつ

報告者：杉本　仁　（真和高校）

基調講演に引き続き、参加者の緊張を解きほぐすことを目的にアイスブレーキング「世界のあいさつ」を行いました。事前に配布された「ニーハオ」「ハロー」等の挨拶と国名が書かれたカードを元に参加者たちは、同じカードを持った参加者を探し、会場内に貼られた該当する国旗のところに集まってもらう取組です。

計画段階では、同じ挨拶でも国が違ったり遊牧民等少数民族の挨拶を入れたり工夫をする中、かなり難しいと予想をしていましたが、カードに書かれた挨拶で話しかけ仲間を探し、交流をはかる姿が会場のあちこちで見受けられました。高校生と留学生との積極的なコミュニケーションもでき、３日間の素晴らしいスタートがきれました。カードは各国の人口に対比して参加者に配られたので、多いところ少ないところと世界の現状も知ることができました。

「イスラム教国の国旗には月が書かれている。」とＥＣが説明すると、留学生から「月」でも「三日月」であることや「星」も描かれていると主張がありました。日本人は多少疑問に思っても、なかなか口に出さないところがありますが、この留学生の積極性は、自己主張していくことの大切さを学びました。また、宗教に真剣に向き合っている真剣さに感心しました。

留学生をはじめ参加者の皆さんの積極的な係わりのお陰で、アイスブレーキングをスムーズに進行することができましたことに感謝します。緊張した面持ちの参加者の皆さんが自然と和んでいき、世界の挨拶は様々ですが、そこには人と人を結びつける不思議な力あると感じずにはいられません！

第１分科会　参加者 18 名

フェアトレード

報告者：高木結衣（熊本高校）

2011 年6月4日、熊本市はアジア初、世界で 1000 番目の「フェアトレードシティ」に認定されたと聞きました。では、そもそもフェアトレードとは何なのか、そして、なぜ必要なのか。そんな疑問からこの分科会が生まれました。

１日目は、アイスブレイクを行い自分の意見を言いやすい雰囲気作りをした後、各々がフェアトレードの第一印象をポストイットに書きました。

そして２日目は、まず、世界の現状を体験することを目的に「貿易ゲーム」をしました。このゲームを通して、発展途上国には情報が無く、先進国の言いなりになってコーヒー、カカオ等の原料が安い値段で買い叩かれてしまい、また、不法な長時間労働や貧困が生まれるという現状を知りました。

そこから皆で解決策を考え、高校生にもできる身近な国際協力としての「フェアトレード」について EC による説明やフェアトレードシティくまもと推進委員会の津江あゆみさんによるお話も交えて、議論を重ねました。途中、参加者によるミニフェアトレードファッションショーやインドの生産者団体「サシャ・ハンディクラフト」の方々のビデオレター等もあり、楽しみながら学び･考えることができました。そこで、フェアトレードの 10 の指針をふまえた上で、「もし貿易ゲームの中でフェアトレードの理念を持っていたらどうなっていたか？」を話し合い、フェアトレードによって実際に生産者の方々の住居や食事が少しずつではあるが改善されていること、そして、自分の役割が生まれることで生産者本人の強い自尊心や誇りが生まれ次へとつながる支援となることをみんなで確認しました。

そして、最後にアクションプランとして「今、高校生の私たちにもできること」を話し合い、まとめとしました。また、その一つとして、フェアトレードを知らない人５人以上に伝えることを第一分科会全員共通の目標として皆で決めました。

今回のポラキャンを「はじめの一歩」として、それぞれが次の行動につなげていってほしいと思います。

第２分科会　参加者 21 名

自己表現

報告者：増山雄輝（文徳高校）

「自分の未来を知ることができたなら！」ということは、誰もが一度は考えたことがあるでしょう。未来を知ることができれば未来をもっと良くするために何らかの行動をとるでしょう。でも、今の自分を正しく知れば自分の目標の為に何をすべきかを考えることは簡単なのです。

期間中に自分の未来を考えるために、自分を見つめ、分析したのがこの分科会です。よりお互いのことを理解し合い、お互いに率直に言い合えるようになるため、３日間の目標を " 分科会全員が大家族になること " と掲げ、様々な活動に取り組みました。互いを名前で呼び合い、学年を言わないというルールは功を奏し、年齢や性別、国境の壁を超えて、互いの良さや改善点を指摘し合うことができました。

分科会の中では、自分の持っている夢について発表してもらいましたが、そこではみんな熱く語れていました。しかし、自分を知ってもらうために、「自分は〇〇です。」という問題の穴埋めをして自己紹介の文書を沢山作ってもらおうとしましたが、なかなかうまく説明出来ませんでした。そこで、活動中に気づいたこと、感じたことを付箋に書き、お互いに分析をしてもらいました。この作業で、自分では気づいていなかった「自分自身」を知ることができたと思います。

今の自分を知ることが出来れば自分の持っている夢に向けて、これからすべきことが具体的に見えて来ると思います。この考え方ができれば、今後の人生において自分の強みとなるでしょう。そして何よりも、ここでできた仲間（Family）は一生もんです！

「自分のことは自分が一番知っている」と思いがちですが、意識してみるだけでそこには違う未来が広がっています。自分の人生、無意識を意識化してみませんか！？

第３分科会　参加者 24 名

多文化共生

報告者：福永健人（文徳高校）

第 3 分科会では、言葉や文化が異なる人たちが共に生きていくことの大切について、様々な活動をとおして学び、考えました。

1 日目は緊張を解すため「ジェスチャーゲーム」や無言で誕生日の順に並ぶ「誕生日チェーン」を行いました。初対面での恥ずかしさも夜のチーム対抗の 4 面バレー（交流会）の頃には打ち解けてきたようです。

2 日目は中国語だけの模擬授業体験で「言葉の壁」について身を持って体験したり、寸劇をとおして日本と外国の間の「文化の壁」について学んだりしました。また、親の都合で来日した高校生が、日本の学校へ転校、まったく日本語が分からず辛い経験したことを発表しました。

参加者は、この２日間の活動で自分が知らない海外で生活することになった場合を想像する等、異なる言葉や文化環境で生活することの大変さを知ることが出来ました。特に、子どもたちは自らの意思に関係なく来日し自分の居場所を見失ってしまうことが多くあることを学ぶ中、外国から同級生が転校して来たら、「相手のことを思いやりたい！」、「先入観を取り払いたい！」、「積極的に交流したい！」等の意見がまとめられました。

実行委員（EC）として、説明が曖昧だったり、焦ってしまって上手く進行出来なかったりしたところもありましたが、参加者の皆さんに支えていただき、最後の報告会ではひとり一人が積極的に発表していただきましたことに、心から感謝します。本分科会のテーマ「多文化共生」について、これからも興味・関心を持ち続け、誰もが暮らしやすい社会を作っていきたい！と思います。

最後になりますが、参加者の皆さん、オブザーバーの先生方や大学生サポーターの皆さん、そして、私たちを支えていただいた全ての皆さん、心より感謝、感謝です。本当にありがとうございます。

第４分科会　参加者 17 名

ボランティア

報告者：永田理子（文徳高校）

第４分科会では、私たちに出来るボランティアとは何なのか？身近なボランティアを知ろう！探そう！と言うことで、活動をしました。

１日目は、アイスブレーキングからスタートし、初対面の人ともうちとけることが出来ました。その後、「赤ちゃんにもボランティアは出来るか？」と言う質問についてグループで話し合ってもらい発表してもらいました。意見は賛否両論で色んな考えがあることを学びました。

２日目は、午前中にボランティアについて基本的なことをクイズや実際ボランティアをされた方のお話を交えながらまなびました。また EC からボランティア活動をする上で大切にしてほしいことを伝えました。午後には、身近なボランティアを実際に知り、探す活動を「フォトランゲージ～写真から読み取る～」「Gift + Issues = Change ～好きなこと + 問題＝ボランティア～」という方法で行いました。その後二日間で学んだことを元に実際の活動案（Action Plan）を考えてもらい、グループでまとめました。最後にボランティアは人それぞれ違うと言うことを学び、自分の考えるボランティアをカードに書いてもらいました。

分科会を通し、ボランティアとは次のとおりとなりました。

①身近なボランティアとは「適材適所」～出来る人が出来ることを出来る時に出来る範囲ですること～
②助けを必要とする人のことを思った行動であること
③一生懸命すること

第５分科会　参加者 22 名

国際協力

報告者：稲岡泰一（文徳高校）

第５分科会では参加者の高校生に国際協力について知ってもらいたいということで、開催しました。１日目はアイスブレイクとオブザーバーの JICA 熊本県国際協力推進員の木下さんの話を聞きました。アイスブレイクでは「誕生日チェーン」と、「ハイ・イハ・ドン」をしました。木下さんのお話では途上国の現状を知ってもらうために映像を見せていただきながら現地の現状をレクチャーしてもらいました。

２日目はまず“貧困の輪”をしました。班を分け、各テーブルに置いてある絵で輪を作ってもらい、輪を断ち切るための援助の方法を考えてもらいました。お金や食料の援助、学校の建設などの答えが出ましたが、貧困問題を解決するためには、一つだけの援助だけでは断ち切ることができないことが分かりました。次に、実際に青年海外協力隊として現地に行かれた大地さんと松原さんに話してもらいました。現地で苦労したことや、うれしかったことについて話してもらいました。

午後からは午前中に学んだことを生かして、実際に青年海外協力隊になってみようということで、架空の国「ソラバスタ国」に対する支援の活動計画を立てるというワークをしました。「ソラバスタ国」の良い点・悪い点を班ごとにあげてもらい、良い点をのばすか悪い点を改善するかで活動計画を建ててもらいました。班ごとにいろいろな活動計画があり、議論が活発に行われました。最後に、今自分達に出来ることを考えてもらいました。世界の現状や、募金活動など、高校生でもできる活動を知ることなどの意見が出ました。

今回、参加者には国際協力について知ってもらえたと思います。将来、この分科会がきっかけで国際協力に携わる人が出てきてくれることを願っています。

第６分科会　参加者 18 名

日本文化

報告者：伊住真央（文徳高校）

私たち第６分科会は「日本文化」について考えました。私はグローバル社会のなかで、日本人は外にばかり目がいっていて日本の中が空洞化しているように感じました。実際に、「あなたにとって日本文化とはなんですか？」と問われたときに堂々と答える事が出来るのだろうか。そう考えたときに今まで受け継がれてきた、伝統的な日本について考える事が大切だと、考えました。

そこで、私たちは自分にとって身近な“遊び”から伝統的な日本の文化を見つめなおす事にしました。

まず、一日目には分科会全員で、「花いちもんめ」、「かごめかごめ」といった日本の遊びでアイスブレーキングをしました。

二日目には、最初に、日本文化と言われて思いつくものを出していきました。留学生の方々からは、「粋（いき）」などの難しい言葉も出てきました。次に、出されたものをグループ分けしました。食べ物、建物、性格…色々な角度からグループ分けをすることが出来ました。次に、一番取っ掛かりやすく、身近な、日本の伝統的な“遊び”を出していきました。けん玉や、折り紙、お手玉、凧揚げ、羽根つき…たくさん出てきました。その中で、けん玉、折り紙、お手玉、あやとりを実際に体験しました。始めはコツが分からずうまくいかなかった人も、周りと教えあいながらコツを掴みうまくなりました。そして、街づくりを熊本でしていらっしゃる建築家の宮本さんに自分の苗字の由来、住んでいる地域の名前の由来の話や、肥後ごまの大会を開催した際の体験談などを話していただきました。最後に、まとめとして、今の遊びと昔の遊びの違い、似ているところ、これから消え行く伝統的な日本の遊びを何故守らねばならないのか、どう守っていくべきか、を話し合いました。今回の分科会では、古くからある日本の文化は日本固有のものであり、それがなくなることは生粋の日本がなくなることであり、誇るべき日本を失うことにもなるので、伝統的な日本文化に触れることのできるような「祭り」や「イベント」で触れてもらい、今後も、ぜひ守っていきたいという結論に達しました。

たった三日という短い時間の中で、日本文化という抽象的で難しいことを考えるのはとても大変でした。話がまとまらない事も少しありましたが、最終的にはみな同じ結論にたどり着けてよかったと思います。今回この分科会に参加したメンバーの人たちが少しでも日本文化について自分の概念を持って、他人に伝えてくれたらうれしいです。

第７分科会　参加者１９名

防災

報告者：坂口涼夏（済々黌高校）

第７分科会「防災」は、昨年の大震災で防災への関心は高まったものの実際に何か対策をとっているという人は少ないという現状を打破するため、「生き残る」をテーマに災害が起こる前にはどのような準備が必要か、災害が起きた後にはどのような対処が必要かを考えてもらいました。

１日目は「サバイバルクイズ」で参加者の生命力を量りました。全問正解者はいなかったので、賞品の乾パンは参加賞として全員に配られました。

２日目はまず「サバイバルゲーム」で身の回りにある日用品から災害が起きた時に意外と役立つものを探しました。骨折時に添え木として教科書が使えるなど班で話し合い、発表することで、新しい発見を共有することができました。日用品への見方が変わり、災害が起きた時も、自分を救い、他の人を救う物を見つけることができるのではないかと思います。

次に「救急救命講座」として、人形と AED を用い、倒れている人を発見したときの対処方法を学びました。人形を相手に心肺蘇生をやってみると、想像以上に難しく、コツと注意が必要でした。

午後からは震災のニュース映像と阪神・淡路大震災の再現ビデオを観て、地震の脅威を改めて認識した後に、災害図上訓練の「DIG」をしました。班ごとに異なる熊本の地図を使い、避難場所や危険な場所を確認し、地震によりどのような被害があるかを予想し、それをもとに避難経路を考えました。

最後にアクションプランを話し合い、「家族と避難経路を確認しておく」「消防署や日赤で普通救命講習修了証を取得する」という意見が出ました。

参加者が家に帰ってから、全員がそれぞれの住んでいる地域に目を向け、家族や地域の住人達と情報を共有し、より多くの人々の防災に対する意識と知識が高まればと思います。

全体報告会

報告者：清水孝仁（文徳高校）

全体報告会は３日間のボラキャンの活動の中でも最も大事な締め、昨年と同様のポスターセッション形式の報告会でグループにわかれて発表者、聞き手に回ると言う形をとりました。発表においては各分科会で３日間の活動で学び、考えたことを発表し、そこで出た質問に対して答えることでより一層考えを深めることができました。それぞれの参加者が発表時に時々自分の意見も交えて発表している姿には嬉しさを感じました。参加者側に考えがしっかり定着していたという実感がじわじわ湧いてきました。

発表後は１５分程度の時間を取り、発表会で出た質問に対する答えを各分科会全員でしっかり話し合い、よりよい答えを見つけました。全体で一つの題について話し合うことでより磨き上げられた答えを見つけることができ、お互いの理解もしっかり深まりました。各分科会からの代表者による分科会のまとめでは、それぞれの分科会での３日間の活動の様子が自分の分科会でなくてもしっかり伝わってくるぐらい内容がしっかりしていました。そして中には自分自身の考え方が変わったという人や新たに目標を持つことができた人など各々が３日間の活動を有意義なものとし、次につなげるアクションプランの準備までできていてボラキャンの３日間が意味したものをしっかり物語っていました。そのあとボラキャンの実行委員長より今までにいたる経緯の説明があり、改めてボラキャンというものを実感していたようでした。

留学生から

DO Phuong Linh （APU　ベトナム出身）

昨年の実行委員の高校生にとても感心させられたので、今年もこのキャンプに参加しました。今年も、このキャンプは最初から最後まで十分に準備されていました。3 日間のプログラムは、とても有意義でした。私たちの分科会は貧困と国際協力について話し合いましたが、若者が世界に対して責任を持っているということに気づかされました。

それに、分科会以外の宿泊の環境も良かったです。私は留学生と高校生が同室になることはとても良いことだと思います。そのことにより、参加者どうしの交流と理解が深まり、国際交流が一層進むと思います。

昨年との違いは、今年は「未来職道」で APU のブースを出して、いろんな国の様々な文化を紹介できたことだと思います。私が見た限り、日本人の学生も「国際的な環境」から何かを学び、楽しんでいたようでした。

MA Kai（APU　中国出身）

今回のボラキャンに参加してとても楽しかったです。また、実行委員の方々のリーダーシップに驚かされました。また、たくさんの学生とも交流出来ました。また、チャンスがあれば、来年のボラキャンにも参加したいと思っています。

いくつかの改善点として、朝の集いと朝食までの間のように自由時間が何箇所かありましたが、参加者全員がお互いに交流に積極的ではなかったようです。これら自由時間にもお互いに交流できるように何かしらのプログラムを考えてみてはいかがでしょうか？

とにかく、ボラキャンはとてもエキサイティングで参加したみんなも楽しめたと思います。私も参加出来て、本当に素晴らしい体験でした。

SHWE Yee Win （APU　ミャンマー出身）

今回のボラキャンではいろんなことを考えさせられました。

今回のように高校生が企画するイベントに参加するのは初めてだったので、とても楽しかったし、新鮮でした。

また、参加者の皆さんが親切で、何事にも積極的だったので、プログラム全体を通して楽しめました。

2 日目に予定されていた「朝の散歩」は突然の雨で残念ながら中止になってしまいましたが、EC の迅速な行動で何の問題も起きませんでした。

分科会では、日本の伝統的な遊びを体験できました。残念ながら私には日本の遊びと日本文化とのつながりを見つけることは出来ませんでしたが、これらの点を改善していけば、ボラキャンはもっと良くなっていけると思います。

全体交流会

4コートバレー

報告者：田中一成（真和高校）

国際ボランティアワークキャンプの１日目の夜、スポーツ交流として「分科会対抗 :４コートバレー」を行いました。４コートバレーとはネットを十字に張り、４つのコートに分かれて行う変則的なバレーボールです。分科会ごとのチームに分かれて２コートで予選リーグを行い、その後、成績の良かった順に４チームずつ分かれてもう１ゲーム行い、２ゲームの合計点数で総合順位を決めました。賞品も優勝・準優勝・ブービー賞（下から二位）が用意してありました。

１日目の夜ではありましたが、ほとんどの分科会がゲームの前に円陣を組み、団結するなど始まる前から体育館は熱気で包まれていました。ゲームが始まると、チーム内でお互いに声を掛け合ったり、コートの外からチームメイトを応援したりととても盛り上がりました。２ゲーム目が始まると、長身の留学生の方の豪快なアタックが決まったり、意表をつくサーブなど工夫したプレーに歓声が上がり、盛り上がりはピークに。４コートバレーを経験したことがある人は少なかったのではないかと思いますが、誰もが楽しめたゲームだったと感じました。

それまで一度も話したことがなかった他の学校の参加者や、留学生の方とも積極的に会話や交流を通して、絆を深める楽しい時間を過ごすことができたと思います。

このスポーツ交流で深めた「絆」で２日目・３日目の活動を充実したものにできたのではないでしょうか。

未来職道

「未来について活動家と話そう」

報告者：家入弘樹（熊本北高等学校）

ボランティアワークキャンプの２日目の夜、未来職道を行いました。

未来職道とは、興味のある活動家の話を聞くことのできる場所です。今年は、６分野 13 団体の活動家が集まりました。

未来職道開始と同時に、皆さん思い思いのブースへと移動し、活動家の話を聞いていました。団体の説明を聞いた後は、積極的に質問したりして、より活動について知ろうとしていました。

私はこの未来職道を通じて活動家の人達は、それぞれの思いを持って活動していることを知りました。その思いは、家族のためや貧困の国の人々のためだったりします。私はこの思いを知って、これからそれを理解し、自分ができる活動に参加していこうと思いました。

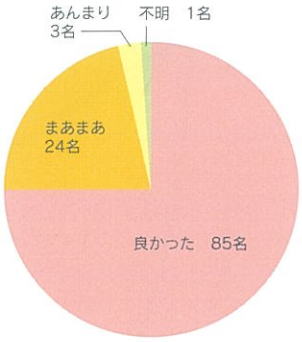
最後に、このような聞ける機会をくださった事務局の皆様と未来職道に協力してくださった皆様＊ありがとうございました。

＊協力者の説明は２ページに掲載

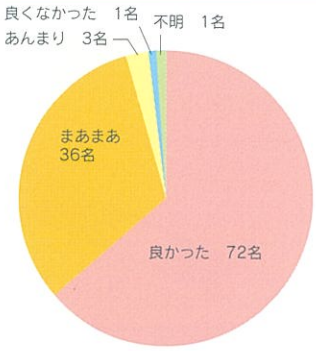
アンケート（回答数 113）

報告者：江藤　峻（熊本高校）

分科会はどうでしたか？

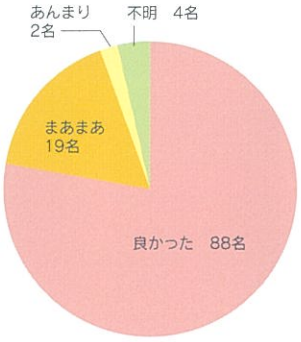


未来職道はどうでしたか？



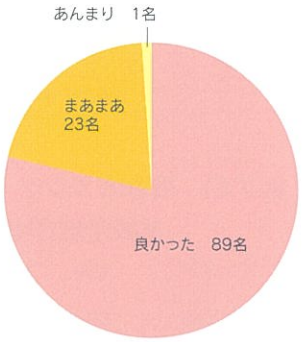
- 将来について考えることが出来た。
- 視野が広がった。
- 自分のやりたいことが見つかった。
- 興味のある分野があまりなかった。

全体交流会「4 コートバレー」はどうでしたか？



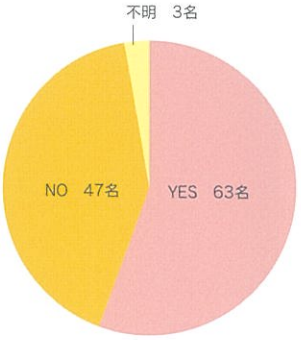
- 盛り上がって楽しかった。
- 同じ分科会の人とより仲良くなれた。
- 分科会全員で楽しむことができた。
- 時間が短くて、あまりボールに触れることができなかった。

全体を通して今回のキャンプはどうでしたか？



- 楽しかった！
- みんな仲良くなって良い思い出になった。
- 留学生と交流できてよかった。
- 自分の視野を広げるきっかけになった。

このキャンプの実行委員をやってみたいと思いますか？



- 半数以上の参加者が実行委員をやってみたいと答えてくれました。

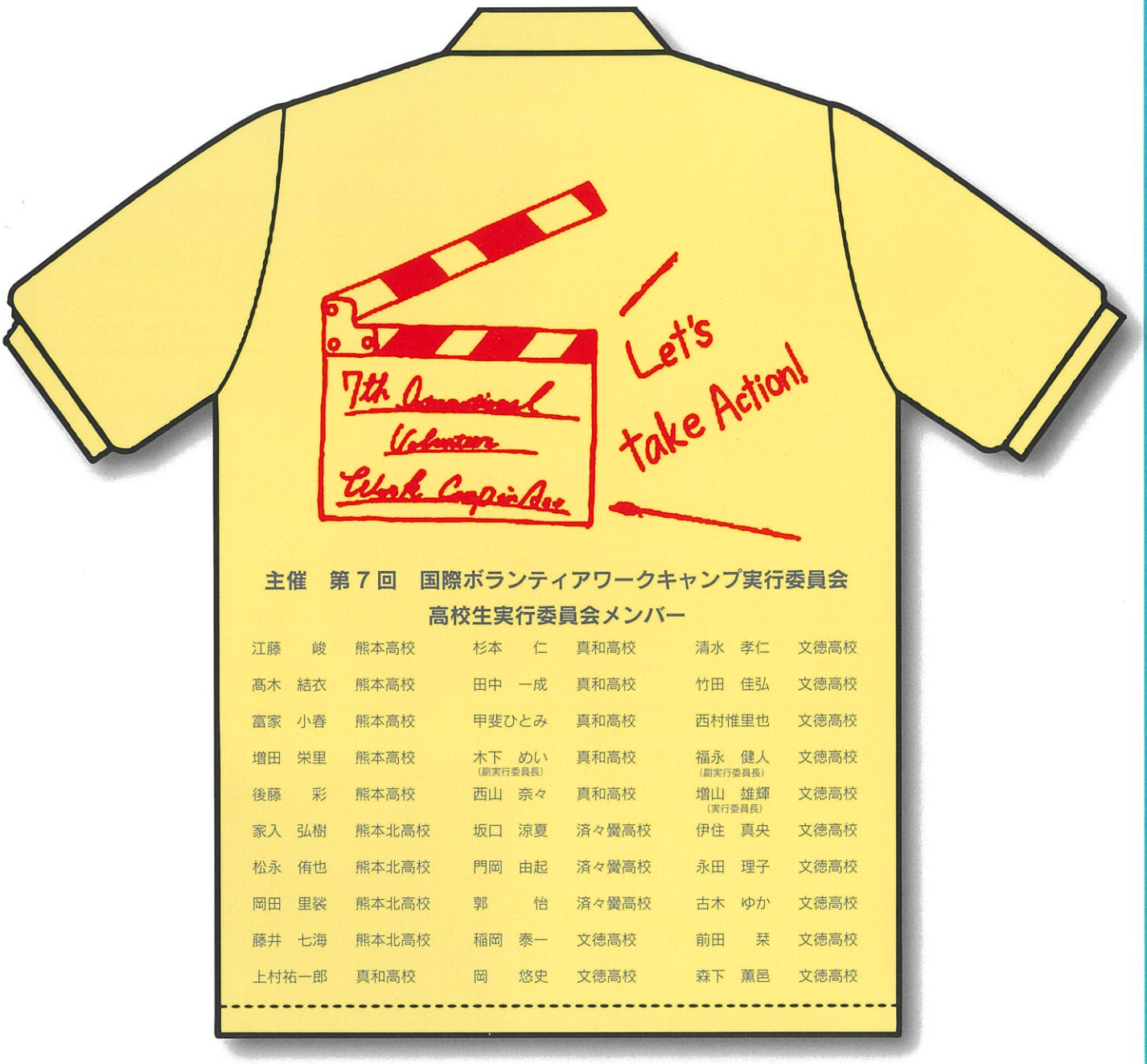
Smile Station

上村祐一郎（真和高校）

私達「スマイルステーション」は毎月第一土曜日の午後 2 時から熊本市国際交流会館で活動しています。

スマイルステーションは高校生のためのボランティアの情報の交換と共有を目的として作られました。月 1 回の活動では情報を交換するだけですが、秋にはタイの高校生との交流事業や、上通の魅力をもっと世間に伝えるために高校生の目線で上通の地図を作る「上通なう」、時には自分たちでボランティアを企画し、スマイルステーションとして活動することもあります。このように活動は多岐に渡っており、高校生たちが学校の垣根を越えて多くの友達と出会い、ボランティアにみんなで取り組んでいけるのが魅力です。

ボランティアに興味を持っていてもどうやって始めればいいのかわからない、つまらなさそう、周りが大人ばかりで居づらい、という人でも友達に会いに行く感覚でボランティアをもっと楽しみ、もっとボランティアを身近な物にしていけるようにしていきたいと思います。みんな気さくでいい人ばかりなので、友達も誘ってどんどん来てください。



主催　第７回　国際ボランティアワークキャンプ実行委員会

高校生実行委員会メンバー

江藤　峻	熊本高校	杉本　仁	真和高校	清水　孝仁	文徳高校
髙木　結衣	熊本高校	田中　一成	真和高校	竹田　佳弘	文徳高校
富家　小春	熊本高校	甲斐ひとみ	真和高校	西村惟里也	文徳高校
増田　栄里	熊本高校	木下　めい（副実行委員長）	真和高校	福永　健人（副実行委員長）	文徳高校
後藤　彩	熊本高校	西山　奈々	真和高校	増山　雄輝（実行委員長）	文徳高校
家入　弘樹	熊本北高校	坂口　涼夏	済々黌高校	伊住　真央	文徳高校
松永　侑也	熊本北高校	門岡　由起	済々黌高校	永田　理子	文徳高校
岡田　里袈	熊本北高校	郭　怡	済々黌高校	古木　ゆか	文徳高校
藤井　七海	熊本北高校	稲岡　泰一	文徳高校	前田　栞	文徳高校
上村祐一郎	真和高校	岡　悠史	文徳高校	森下　薫邑	文徳高校

■構成団体（順不同）

NPOプロジェクト
熊本ユネスコ協会
熊本留学生交流推進会議
株式会社日本リモナイト
一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

■協賛・協力団体（順不同）

熊本学園大学
㈱秀拓
立命館アジア太平洋大学（APU）
独立行政法人国際協力機構九州国際センター

■後援

熊本県教育委員会
熊本市教育委員会
熊本日日新聞社

■事務局

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団
熊本市中央区花畑町4番18号　熊本市国際交流会館
TEL: 096-359-2121

平成 24 年度　子どもゆめ基金助成事業